慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ゾムバルトの「プロレタリヤ社会主義」
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1925
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.19, No.4 (1925. 4) ,p.495(1)- 520(26)
JaLC DOI	10.14991/001.19250401-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19250401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時事新報

曾て卒先十二頁を發行した時事新報は
更に十四頁新聞の魁を致しました
讀者の激增と共に總ての階級有らゆる趣味を滿足
させる爲めに紙面の擴張を感じたからであります

紙幅の增大と内容の充實せる
點を考ふれば一ケ月定價
一圓の時事新報は最廉
且つ最良の新聞
であります

□ □ □

朝刊＝十頁
夕刊＝四頁

外に毎週漫畫附錄

東京市京橋區南鍋町二丁目
時事新報社
電話銀座四六〇番
振替東京五九三五

三田學會雜誌　第十九卷　第四號

ゾムバルトの「プロレタリヤ社會主義」

小泉信三

ゾムバルトの名著「社會主義及び社會運動」が根本的に改稿せられて、上下二卷の大冊となつて出た。Der proletarische Sozialismus(“Marxismus“) Zehnte neugearbeitete Auflage der Schrift „Sozialismus und soziale Bewegung“ I. Band Die Lehre. II. Band Die Bewegung (I. Teil: Chronik. II. Teil: Soziologie. III. Teil: Geschichte) Jena, 1924 がそれである。改稿は新材料蒐錄のみの爲めに行はれたものではない。著者の近世社會主義に對する態度は、舊版に於けるものとは全然違つてゐる。舊版の扉に掲記せられた „Je ne propose rien, je n'impose rien: j'expose“ が削除せられたのは、偶然でないかも知れぬ。

今や此書に於けるゾムバルトの態度は、獨逸精神獨逸文化の爲めに、西歐傳來の思想たるマルクシズムの虚妄無價値を高唱して獨逸國民を警醒せんとするものゝ態度である。

エンゲルスは或機會に我等獨逸社會主義者は曾にフリエー、サン・シモン及びオーエンのみならず、又カント、フイヒテ及びヘーゲルより出でたる事を誇りとすると云ひ、又獨逸勞働者運動は獨逸古典哲學の承繼者だと云つたことがある。併しマルクス主義者の立場よりすれば、近世社會主義運動社會主義思想は、如何なる國に特有なる哲學の産物でもなくて、文明諸國民に共通なる資本的生産方法の産物でなくてはならぬ。而して資本的生産方法は、「生産力」發達の一定段階に適應するものとして、必然的に出現しなければならぬものである。此見地より見れば、一民族固有の精神、一民族固有の文化といふが如きものは、僅に從屬的の意義を有するに過ぎぬ。此等の精神、文化は其自身生産力の發達に由て説明せらるゝか、然らざる迄もその社會運動に及ぼす影響は極めて限られたものでなくてはならぬ。否なマルクシズムを極端に嚴格に解釋すれば、諸國民の文化には、資本主義長幼の別から起る先後の別のみがあつて、此以外に民族的特色なるものはあり得ぬ筈だと謂つても好いのである。ゾムバルトは決して無批判なるマルクス追隨者ではないが、併し近世思想家にして彼れに最も深き影響を與へたものがマルクスであつた事は、蔽ふべからざる所である。彼れはマルクスに據つて視、マルクスに據つて考へて、「近世資本主義」を書き、「社會主義社會運動」を書いた。固より意慾の對象と認識の對象とを混同する處に「科學的」社會主義の根本缺陷が存する事を、ゾムバルトは當初から指摘してゐたが、重要なる幾多の點に於て、彼はマルクス、エンゲルスの所説を採用することに甘んじてゐたのである。社會主義は近世社會運動の精神的沈澱物だといふのがそれである。（エンゲルスは「プロレタリヤの理論的表現」が即ち社會主義だと謂つて居る。）社會階級を分つて封建貴族、小プルジョソジイ、プロレタリヤとすることがそれである。資本主義の發達に連れて、諸國の社會運動はやがて統一せられんとする傾があると斷定したことがそれである。彼れは近世社會の本質に關する一切の智識は共産黨宣言に含まれてゐ

るといふ評言の「實際に或程度まで正しい」ことを承認し、幾十年社會的事物の研究に沒頭した者と雖も、常に豫期せざる未聞の新眞理を共產黨宣言中に發見する。予は既に幾百回之を讀んだ。而かも猶ほ再び之を手にすれば每回新に之に惹着けられる」と言つたのである。

然るに世界大戰はゾムバルトをしてその今迄閑却した世界史の他の一面に着目せしめた。獨逸が四面敵を受け、國を擧げて奮戰するに及んで、ゾムバルトが愛國の熱情は、彼をして獨逸人が特有の文化と特殊の歷史的使命とを擔ふ特別の民族なることを感せしめた。謂へらく、有ゆる大戰爭は世界觀の衝突を意味する。今回の戰爭も亦た獨逸に依て代表せらるゝ一世界觀と、英吉利に依て代表せらるゝ他の一世界觀との衝突に外ならぬ。聯合國の宣傳は、今回の大戰がデモクラシイと野蠻主義との戰爭であるといふ。詢に其通りである。ギヨオテ、カント、フイヒテ、ヘエゲルの後裔たる獨逸人は、佛蘭西革命に發する西歐羅巴の近代思想と戰ふものである。それは唯物主義と理想主義との戰である。權利を主張する商賈（Händler）と義務に服する英雄（Helden）との戰である。これがゾムバルトの Händler und Helden, 1915 に主張する所の大意であつた。

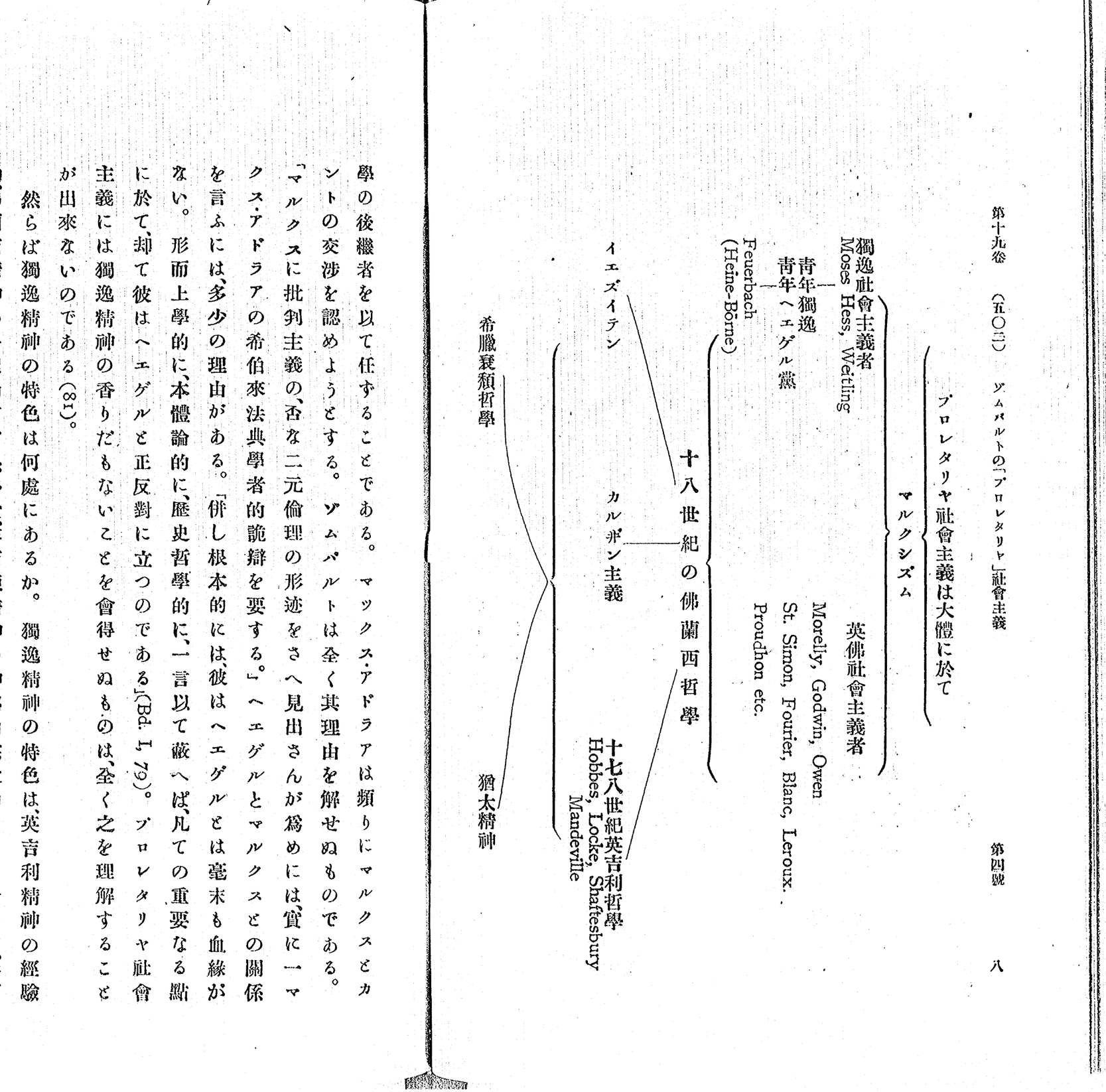
然るに「英雄」は「商賈」に征服せられて、外には「エルサイユ條約が締結せられ、內には社會黨の共和政府が組織せられた。ゾムバルトの獨逸民族を愛する情は、轉じて敎養訓練なき canailles の增長を憎む情となつた。「支配權を掌握した民衆が、今日屢々犯して居る狂暴と罪惡とは彼をして極度の反感を以てプロレタリヤ社會主義に臨むに至らしめた。一九一九年彼れは Grundlagen und Kritik des Sozialismus の緒言中に記して曰く、「我國今日の狀態は、プラトンをして激して其の社會主義的ユウトピヤを作るに至らしめた衆愚政治のアテネ共和國の狀態と甚だ多くの點に於て類似して居る。唯だ最も重要なる相違は、恐らく當時人民集會に全く代表されてゐなかつた奴隸の大衆が今日では正に權力者となつてゐる一事であらう。併し乍ら、奴隸の暴動に直ちに社會主義理想の實現を認めることが、今日の最も不幸なる誤謬の一である」と（a. a. O. Bd. I, XI）。

社會主義の定義も改められた。それは最早「近世社會運動の精神的沈澱物」ではなくて、「反營利主義的傾向を有する實踐的社會合理主義」（praktische Sozialrationalistik mit

anti-chrematistischer Tendenz）と解せらるゝに至つたのである。更に詳しく言へば、社會主義とは人類社會に正義の理想を實現せんとする、理性より生れた努力で、此目的は、營利經濟に代ふるに無營利經濟を以てする時にのみ成就し得べきものなりとなすの點に於て一致するものだと謂ふのである（a. a. O. VII）。既にこれ丈けを見ても、勞働者階級は「實現すべき理想を有せず」と主張するマルクシズムが右の定義に吻合せぬことは、略ぼ推測されるが、ゾムバルトは更に進んで、近世社會主義に於ては、社會主義理想と、社會主義とは全く無關係なる有りと有らゆる異分子とが相混合されて居ることを明言して居る。所謂異分子の第一は、プロレタリヤの解放努力、第二は社會進化理論である。社會主義的思想とプロレタリヤ思想との結合が甚だ密接なる爲め、近世社會主義を定義して社會運動の精神的沈澱物となすものもあつたのだが、より高い見地よりすれば、是は固より許容すべからざることで、プロレタリヤの階級利害が社會主義と何等の關係なきことは、それとブルジョワジイ階級利害との無關係と毫も撰ぶ所はない。又社會進化理論は決して社會主義と必然の關係あるものではなくて、社會主義者も非社會主義者も等しく採用し得べきものである。一定の社會的信仰、希望、心願、評價、意欲の表現たる社會主義は、社會科學と毫末も相關せざることは論を俟たぬ。」此の三つの異分子―社會理想、社會理論、階級運動―が無理に外面的に一個のものに結合せられたのが、マルクシズムである。併しマルクシズムは元來社會主義ではない。マルクス主義者が社會主義者であれば、それはマルクス主義者たるが故にではなくて、別の理由からである。獨自の特色を有するマルクス的社會主義なるものはないのである。ゾムバルトは大體右の如く主張するやうになつた（a. a. O. IX-X）。而して彼れの近業の主題となるものは、一面に於て社會主義其者よりも狹く、一面に於て此より廣き此のマルクシズムである。

ゾムバルトが言はんと欲する所は、「近世、プロレタリヤ社會主義は、『西歐』即ち拉典―アングロサクソン的精神の刻印を擔ふもので、其の眞本質に於て非獨逸的のものなる」の一事である。彼れはプロレタリヤ社會主義思想の思想史的系統を左の如き表に示してゐる。（Der p. S. i. Bd. 84）。

されば彼れが忍ぶこと能はざるは、時としてマルクシストの、僭して獨逸古典哲



學の後繼者を以て任ずることである。マックス・アドラアは頻りにマルクスとカントの交渉を認めようとする。ゾムバルトは全く其理由を解せぬものである。「マルクスに批判主義の、否な二元倫理の形迹をさへ見出さんが爲めには、實に一マクス・アドラアの希伯來法典學者的詭辯を要する。」ヘエゲルとマルクスとの關係を言ふには、多少の理由がある。「併し根本的には、彼はヘエゲルとは毫末も血緣がない。形而上學的に、本體論的に、歷史哲學的に、一言以て蔽へば、凡ての重要なる點に於て、却て彼はヘエゲルと正反對に立つのである」(Bd. I, 79)。プロレタリヤ社會主義には獨逸精神の香りだもないことを會得せぬものは、全く之を理解することが出來ないのである(81)。

然らば獨逸精神の特色は何處にあるか。獨逸精神の特色は、英吉利精神の經驗的、佛蘭西精神の合理的(rationalistisch)、露西亞精神の神秘的宗教的なるに對して、形而上學的なることに在る。西歐精神の獨逸精神と異なる所はその超越(Transzendenz)を缺くことにある。然しプロレタリヤ社會主義にも哲學がないのではない。「プルジョワ」啓蒙哲學がそれである。たゞ啓蒙哲學は、社會主義の基礎として用ゐん

が爲めに一層粗野なるものにせられたに過ぎぬ。ゾムバルトは毒舌を弄して曰く「社會民主々義哲學」の『ブルジョワ啓蒙哲學』に於けるは、稍々下婢の服裝の淑女の服裝に於けるが如きものである。樣式は後者が嘗て身に着けたのと同じである、が、たゞ今の着用者の粗野なる趣味と乏しき資力とに適合する丈けの差違がある。何よりも第一にそれは昨日の流行である」と（85）。

ギヨオテは謂つた。「世界史及び人類史の眞に唯一最奥の問題（テエマ）は信仰と無信仰との衝突である」と。今獨逸精神とプロレタリヤ社會主義との對立は、ゾムバルトによれば、此の信仰と無信仰との衝突に外ならぬ。有信仰といふは、別に一の超越世界があつて、現世は其影像に外ならぬことを信ずること、神を信じて神の信仰を此の地上に於ける一切行業の指針とすることの義に外ならぬ。嘗に啓示を信ずる者のみではない。凡ての理想主義的思想家及び詩人は、皆な此意味に於ける有信仰者である。分つべきものは啓示信仰と理性信仰と、保羅とプラトオとではなくて、信仰と無信仰と、即ちプラトオとフォイエルバッハとである。而して純粹の獨逸精神を體するものは、皆此意味に於ては有信仰である。獨逸古典文學、獨逸古典哲學は有信仰の文學哲學であつた。「精神と世界史並に現實とを能く調和せしむるものは既に生起せる所のもの、又日常生起しつゝある所のものは、嘗に神なくしては哲學の精神を概括して言つた。ヘエゲルは其歷史哲學の結論に獨逸古典生起せざるのみならず、其本質上神其者の業なりとの洞察是のみ」と。此精神と全然相容れざるものは、「無宗教、是れ我宗教。無哲學是れ我哲學」と公言したフォイエルバッハ――の立場である。マルクスはフォイエルバッハに一步を進めたものである。マルクスの事業は、その「唯物論の原理を擴張して人類の歷史に及ぼし、自然科學的唯物論の外に歷史的唯物論を立てた」ことに在る。神に對する信仰と共に人格不死不滅に對する信仰も失はれた。「神は不死不滅の前提である。神なくしては不死不滅はない。……自然は死を與へる」（フオイエルバッハ）。エングルスは謂ふ、「宗教的慰籍の欲望ではなくて、肉體の死後、一度び承認せられた靈を如何に處置すべきか……の當惑が一般に退屈なる人格不死不滅の想像に導いた」と。これがプロレタリヤ社會主義の精神的態

度である。然し神を忘れた者に愛はない。「神が愛を造り、愛が共同を、共同が文化を造るのである。神なくしては愛なく、共同なく、文化もない」(I. 250)。近世社會主義者の殆ど凡てに通有なる特色はその愛なきことである。而してその最も甚しきものが、カアル・マルクスである。

ゾムバルトのマルクスに對する評價の甚しき變動は、人をして一驚を喫せしめる。之を讀む毎に新なる未聞の眞理を發見せざることなしと言つた「共産黨宣言」は「今日人の知る如く、全く何等の新しき思想を含まずして全然謬れる思想を以て充溢せるもの」となつた(Bd. II 328)。マルクスの人物に對する其批評も頗る苛酷である。マルクス性格の特色としてゾムバルトが列擧する所は、學問的稟賦、激情的支配慾、政治的能力の缺乏、否定的攻撃的性情及び憎嫉(Ressentiment)の五である(Bd. I 65-74)。マルクスは直接生活に接觸せぬ讀書人(Büchermensch)であつた。常に書籍が彼れと世界との間に中介した。然るに此讀書人の裡には烈々たる激情の火が燃へてゐた。此激情は發して事業慾となつた。更に又彼れの異常なる意志力と精神的能力とは、發して彼れの支配慾、權力慾となつた。彼れの性格の特色をなすものは「敵に對する憎惡と報復慾、競爭者に對する羨望と嫉妬、從隨者に對する君主感、人類一般に對する深き輕蔑」である。而かも此巨人的人物の生涯は失敗の連續であつた。家庭生活に於ては、彼れは入質とエンゲルスへの無心狀との間を彷徨してゐた。その發行する新聞は、何れも間もなく廢刊に歸した。その生涯に唯一の稍〻大なる事業たりし國際勞働者協會も、數年を出でずして不面目なる終局を告げた。而して彼れが望を繫けた最後の骨牌も失敗に終つた。「資本論」の世界革命的影響を、彼れは見るに及ばずして逝いたのである。此等の失敗には、彼自身の政治的能力缺乏の罪に歸すべきものもある。併し彼れの際限なき自負心は、之を容認することを許さない。彼は悉く之を境遇の責に歸した。彼れが一身の困窮、彼れが一切の失敗を悉くプルジョワ社會、就中普魯西に嫁した。其處で彼れの感情は益々毒せられた。精神的破產を防がんが爲め、彼れは己れを欺いた。己れ一人を重要の人物とし、他を悉く愚人とする性癖は益々昂じたのである。彼れに從へば、彼れ以前の經濟學者は皆昧者である。

ビスマルクは無能なる小ユンケルである。ラッサアルの煽動文書は中學六年生の剽竊で、一讀の勞に値せぬものである。斯く他人、殊に何事をか成し遂げた他人の價値を傷けることに、既に彼れの人物の他の一面が現れてゐる。彼れの憎惡、若しくは惡意（Gehässigkeit）がそれである。憎惡と懷疑癖とは相合して批評を生み出した。憎惡と批評とは彼れをして辛辣なる毒語を用ゐしめた。此精神狀態は現れて「心理的悲觀主義」となつた。歷史の進行は畢竟人間の惡しき一面が善き一面を克服することに外ならぬと見るのである。憎嫉（Ressentiment）はマルクスが他の幾多社會主義者と分つ所である。憎嫉は安心立命を得ぬ所から起る。併し同時にそれは自己の道德的創造力及び、マルクスにあつては、更に政治的能力に對する自信の缺乏と密接に相結び付いて居る。此の自信の缺乏は、マルクスをして定命論（Fatalismus）に陷らしめた。併しマルクスの定命主義は、クロムエル、ワルレンシュタイン、ナポレオン又はビスマルクの定命主義とは趣を異にする。彼等の定命主義は、より高き意志の手中の用具たることを自覺する所から生ずる。即ち信仰が其基礎となつてゐる。之に反しマルクスの定命主義は不信仰に基づいてゐる。畢竟絕望して責任を自然力に嫁するといふに外ならぬのである。

マルクスに對するゾムバルトの無假籍なる批評は、また其「亞流」にも及んでゐる。最も憤激せる社會主義者は最も甚しき憎嫉の念を抱くものだといふ例にロオザ・ルクセムブルグを擧げて、彼女は――獨逸に於ては――四重の憎嫉に惱まされてゐる。「女子として、外國人として、猶太人として及び不具者として」といふの類である。（I, 76）。

宛てマルクスの文章の猛烈噴火山に比すべきを嘆賞したゾムバルトは、今や其毒惡に厭惡の感を催してゐる（I, 70）。然し變つたのは、其の文章に對する評價のみではない。マルクシスト等が解する意味に於ける「科學的」社會主義は、之を純論理的に考察すれば、四角の圓といひ、黃金製の蹄鐵といひ、倫理的物理學といひ、感情に滿ちた化學といふの不合理に等しい。科學的社會主義なる語は、「社會主義」が一の認識問題なることを意味するのであるから、それは認識と行動と、必然の王國と自由の王國と、回顧と前望となる二つの存有領域の論理上不可能なる混同から生じたものだと謂ふのは（I, 299）ゾムバルトが昔から主張してゐた事だが、彼れが階

級闘爭説を否認することは、吾々の豫期しなかつた所である。ゾムバルトが見る所では、マルクスの階級闘爭説は冷靜なる科學的認識たるよりも寧ろ大部分彼れの熾烈なる政治的意志の表現と見るべきものであつて、此處から其の矛盾曖昧不明確が生ずるのである。マルクスは一定の經濟制度に屬することを標準として、ブルジョワジイ、小ブルジョワジイ及びプロレタリヤを分つた。併し此の階級論の第一の缺陷とすべきは、一國人民中最も重要にして、多くの場合最も多數なる集群、即ち農民を度外してゐることである（I, 371）。次に不明確なのは、「階級利害」の概念である。階級利害とは何か。此の「利害」は個々の階級成員に取て超越的なものであつてはならぬ。若しさうであつては、利害は個々人に取つて一のイデエとなり、階級利害の爲めに戰ふことは、マルクシストの立場からは許し難いイデエへの奉仕になる。「故に『階級利害』は少くとも個々人に取ても內在的のもの、即ち彼れの個別利害でなくてはならぬ」。然るに個々人の利害は、種々樣々である。そこでプロレタリヤの「正しき利害」といふ事を言へば、果して誰の目から見ての「正しき」利害なるかの難問が起る。「共產主義の理想をプロレタリヤの『正しき』利害と同一視することは bluff に過ぎぬ」（I, 373）。プロレタリヤの階級的共同意識の發生を妨げるものには、職業上、經營上及び個人的なる樣々の特殊利害がある。併し假に勞働者の階級意識が充分發達して、共同して其階級の利害を主張するに至つた場合にても、此利害其者が却て社會主義的勞働者運動の發生に對する妨害となることがある（II, 165）。例へば近年に至るまでの英米二國に於けるが如く、勞働者の經濟上政治上の利害が却て社會黨の組織を阻止する場合がそれである。

國家といふ國家は皆な階級國家だといふ說も、ゾムバルトは承認しない。唯物史觀の立場から云へば、支配階級は即ち經濟上の支配階級、即ち現在の文明諸國に於てはブルジョワジイでなくてはならぬのに、歷史上の事實を見れば、此の「支配階級」は、必しも常に「支配階級」でないからである。ルイ・ナポレオン當時の佛蘭西、十一月革命以前の普魯西獨逸に於ては、ブルジョワジイは「支配階級」ではなかつたのである（I, 374）。「既往一切社會の歷史は階級闘爭の歷史である」との命題も同樣である。此命題を證明しようとすれば、演繹的方法によつても、歸納的方法によつても、結局形而上學に落着かなければならぬ」といふのである（I, 376）。

そこでゾムバルト自身嘗て主張したやうに、プロレタリヤ運動は、直ちに社會主義運動たるものではない。「社會主義は、嘗にプロレタリヤ階級利害の思想的反映たるのみならず、一部分階級利害の圈外に存する其の特有の根柢を有する」のである（II, 168）。これは反面から見れば、「近世社會主義運動に取つての非プロレタリヤ分子の意義は重大である」と言ふことに外ならぬ。然らば此等非プロレタリヤ分子をして社會主義者たらしむる動機は何か。第一は宗教的、倫理的、藝術的動機、即ち概括すれば、理想への奉仕である。第二は同情である。第三は世界及び人類に對する否定的感情である。一切の不滿は此に屬する。己自身に對し、妻に對し、子に對し、上長に對し、國家に對し、失敗に對し、世に認められざることに對する不滿は、或事情の下では、人をして政治上の反對者、即ち今日では社會主義者たらしめる。此不滿が激情的人物にあつては、嫉妬、猜忌、憎惡となる。嫉妬と憎惡との謂はゞ開化せる形態が Ressentiment である。不滿と憎惡とが積極的の形で現れると反對慾、更に進んでは破壞慾となる。第四は利己心に發する樣々の動機である。（イ）純然たる業務上の利害。社會主義的書籍新聞の出版者が社會主義を奉ずるが如きは是である。（ロ）資產沒收の危險を免れんと欲するの念が屢々富豪をして社會主義者たらしめる。（ハ）感覺慾が往々人をして身を革命黨に投ぜしめる。即ち色食の樂に耽り、阿片コカインを喫用すると共に政治上の過激主義を弄ぶのである。（ニ）功名心。功名心と Ressentiment との結合は、ラッサアルに於て典型的一例を見る。（ホ）有ゆる種類の偏執狂的世界改良家は、屢々其の可能秘法を實行する機會を獲んが爲め社會主義運動に參加する。第五は、思想的流行病感染である。「朋友同胞が社會主義に改宗し、社會主義宣傳が到處に行はれると已れも亦社會主義者となる」。第六は傳統である。（イ）社會主義者は惰性で社會主義者たることを續けてゐるといふ事がある。（ロ）一度社會主義者となつたので、足を洗ひ度くても洗へなくなつてゐるのがある。（ハ）社會主義者の子が社會主義者になるといふ事がある。ベエベル、リイブクネヒト、并クトル・アドラアの子等の場合がそれである。

然らば此等の動機に依て動かされて最も社會主義運動に參加し易いものは何人等であるか。それは（一）青年（二）廢頽人物、精神病者（三）外國人（四）一階級の籍を削られたるもの（バクウニン、シユワイツエル、オスカア・ワイルド等の如き）（五）女子殊に（六）

猶太人である。ゾムバルトが此列擧をなすに當つて批判を交ぢへ感情を交ぢへてしてゐることは、例へば女子が何故に社會主義運動に投ずるかを説明するに當つて「純粹の婦人は保守的である。……然るに純粹の婦人は今日では、『近世的』婦人、即ち解放せられたる婦人、『自由なる』婦人、『政治的』婦人、『侶伴』と稱する奇妙なる創造物の爲め益々壓倒せられてゐる」と謂ふに徴して明である（II, 151）。

此のゾムバルトが近世議院政治の醜陋を憎むのは、異しむに足らぬ。議院政治に其者を排斥するのではない。無産者の大數に選擧權が賦與せられて、本來貴族的なる「議會の樣式」の破壞せられ、選擧が「無良心なるデマゴオグとボツスとの唾棄すべき業務」となつたことを憎むのである。貴族的議會の民主的議會に優れる實例を示さんが爲め、彼れは戰前の普魯西貴族院と獨逸帝國議會とを比較して居る（II, 250）。

同じゾムバルトが、社會黨の領袖は皆なデマゴオグだといふのも亦た同じく不思議ではない（II, 279）。デマゴオグの反對極をなすものは、眞の指導者（echte Führer）である。眞の指導者とデマゴオグとは何處が違ふか。少しくゾムバルトの謂ふ所を誇張すれば、眞の指導者たり得るものは、たゞ獨逸精神を奉するものゝみである。換言すれば、眞の指導者は有信仰者である。神に命せられて、其意志を地上に行ふものたる自覺を有する人である。之に反してデマゴオグの活動は、超世界的威力と何等の連繫を持つてゐない。彼れの目的は、純合理的粹量に基づいて、主として一身の利害に依て決定される。そこでデマゴオグには、其人格にも活動にも温みが缺けてゐる。此の温みは、超世界的理念界との結合に依て始めて生ずるのである。信仰なくして愛はない。「眞の指導者を其國民（Volk）と合一せしむるものは愛である。デマゴオグを其民衆（Massen）と結付けるものは、共同の敵に對する憎惡である」。「眞の指導者は常に上方に、光明に導く靈の力に訴へ、建設的、積極的、共同形成的本能と感情とを醒覺せしめるが、デマゴオグは、低卑なる激情に訴へる。人間胸裡の賤民（カナイユ）に、嫉妬、憎惡、渴望、利己心に訴へる……」。眞の指導者は、その率ゐる者の精神的道德的水準を高め、デマゴオグは之を低める。前者は「人をして其の狹隘なる私を超脫せしむることに依て、之を解放し、後者は個人的欲情と快樂との鐵

鎖に繋ぐことに依て、人間を奴隷たらしめる」(II, 274)。

ゾムバルトの、思想とプロレタリヤ社會主義とが根本的に相容れぬことは、これで充分明白になつたであらう。プロレタリヤ社會主義中の最もプロレタリヤ的なるものは共産主義である。されば彼れが諸國の共産主義者を罵るに當つて、毫も其筆に撿束を加へないのは當然である。彼れは諸國共産黨がソヸエト露西亞から財政的援助を受けてゐる事實を指摘し、併し假に事實上の證據がなかつたとしても、「彼等諸國共産黨の露西亞本部に對する卑屈なる態度に徹して斯く論結しなければならぬ」と謂つて居る。共産黨首領等が若し經濟上にも依頼する所がなければ、彼等が露西亞人から蒙つてゐるやうな屈辱的な待遇を甘んじて受ける筈がないといふのである(II, 449)

さて勞農露西亞共者に就いては何う云ふか。固よりゾムバルトは、民衆は指導せらるべきもので指導すべきものではないと信じてゐるのだから、露西亞の實質上の政體は、レニンの生前には絶對君主制で現在に於ては專斷執政官制だといふのは(II, 460)、必しも貶毀の意味を含んで居らぬかも知れぬが、今日も猶ほ、「ボルシヱヰキ政府の施設といふ施設は、皆なそれが五十萬人の共産黨員、更に嚴密に謂へば、廿五人の領袖の權力位置を果して强固ならしめるか否かの見地からのみ考察せられてゐる、而してその然る場合にのみ採用せられて、その果して共産主義的特色を帶ぶるものなるか、資本主義的特色を帶ぶるものなるか、その民主的精神に出づるものなるか、專制的精神に出づるものなるか、其の公益に利あるか、害あるかを問はぬ」に至つては、固より「有信仰」なるゾムバルトの許すこと能はざる所であらう。彼れが露西亞革命當局者の有ゆる偉大高貴美麗なるものを貶しめて卑小低賤醜行なるものと同列に置かんとするを見て痛憤禁せず、之に對して下した辛辣なる批評には、一種の雄辯の自ら人の耳を傾けしめるものがある。

「權力者(勞農露西亞の)自身が其事業に滿足してゐることは、異とするに足らぬ。彼等の榮達は誠に赫々たるものである。猶太人廓(Ghetto)の陋巷、若しくは外國の亡命客珈琲店を出でゝクレムリンの華麗なる房室に入り、卑賤なる三文記者の地位を去つて光榮ある歐洲最大國の支配者となる。是は如何に熾烈なる功名心を

も滿足せしむるに足るものである。

「併し共産主義を信ずる大衆にも、亦たボルシェヰズムが惡魔の仕業なることを納得せしむることは出來まい。彼等は吾々がそれを認めず、又其の全く存在することなき處に價値を認め、又未だ依然として信仰希望に滿ちて居る爲めに、樣々の缺陷を看過してゐるのである。彼等に向つて、共産黨支配の下に於て、道德上審美上露西亞は豚小屋と化した……と云へば、彼等は答へて曰ふであらう。それが正しく吾等の望んだ所であると。加之彼等の此判斷は露西亞プロレタリエル及び農民幾百萬人の間に反響を見出すのである……。

「之れが正しく吾等の望んだ所のものである。ブルジョワ的の意味に於て神聖高貴美麗高尙と認められたる凡てのものは破壞せられて、最早や何等の大なるもの、高きものなく、最早何等の上下はない。凡てが下である。それは當さにさうでなくてはならぬ。吾々は低處に存せざるものには全く與かることが出來なかつたから、又何人もそれに與かることを得てはならぬ。吾々凡てが學者たることは得なかつた。故に學問をなくなさなければならぬ。吾々凡てが伯爵にはなり得なかつた。故に伯爵をなくなさなければならぬ。吾々凡てが宏壯なる邸宅には住むことが出來なかつた。故に宏壯なる邸宅はなくなさなければならぬ。吾々凡てが純潔ではあり得なかつた。故に凡ての者が穢汚でなくてはならぬ。吾々は神を信ずることが出來なかつた。故に他人も亦神を信じてはならぬ。此論法は、吾々がプロレタリヤ社會主義の理論的考察によつて充分知了する所であるが、此に吾々は實際の心情として、活きて作用する勢力としてのそれに遭遇するのである。」（II, 491）

ゾムバルトが論ずる所は頗る多岐に亘つてゐる。然し其書全篇を通じて唱歌の refrain の如く、常に繰返して說かるゝものは、憎惡に對する愛、無信仰に對する信仰、フォイエルバッハに對するプラトオである。而してゾムバルトが說く所に從へば是は畢竟西歐精神に對する獨逸精神に外ならぬ。彼れは曰ふ、プロレタリヤ社會主義者は、人性を誤認して居る。彼等は我等が信仰なくしては一日も生活し得ざることを認めて居らぬ」（I, 225）。マルクシズムに對する彼れの批評は、畢竟此

一語に盡きるのである。而して此結論は論の發途に先だつて既に與へられて居る。彼れの頗る豐富なる引證にも拘らず、「プロレタリヤ社會主義」が學問的著作よりも Tendenzschrift たるの嫌を免れないのは、此が爲めである。或は此を目するに一篇の抒情詩を以てする者があつても、それは甚しい妄評ではない。而して本篇の始めに記したやうに、ゾムバルトの右の傾向は、既に開戰後間もなく著された Händler und Helden に現れて居るから、彼れの近業も或意味に於ては世界大戰の産物だと謂つて好い。世界大戰は獨墺の公認マルクシスト中にも、幾多の、或はマルクシズムに對する信仰を薄くし、或はマルクシズムと所謂獨逸精神との調和に腐心するものを出でしめた。ゾムバルトは穿鑿と推究とに沒頭する學究ではない。彼れが言ふ事は、當否如何を問はず、彼れが言はんと欲することである。往日マルクス心醉者たりし彼れをして今やマルクシズムには殆ど一も取るべき所なしと言ふに至らしめたものは、研究の進歩ではなくて、ゾムバルトの裡の感情の嵐とも謂ふべきものである。

生産消費の均衡に關する論爭

（セイの市場理論を中心として）

増井幸雄

一

私は嘗て、一般には Adam Smith の經濟學説を通俗化して經濟學に形態を與へ之を普及せしめたる功勞者なりとして知られて居る Jean-Baptiste Say は、大體に於て Smith の祖述者と認めらるべきことは疑ないが、而も個々の點に於ては其の所説は Smith の上に出でゝ斯學の進歩に貢獻する所決して少なからざりしものであると云ひ、幾多の經濟學者並びに經濟學史家は Say の最大の貢獻たり榮譽たるものとして其の市場理論（Théorie des Débouchés）を擧げて居ることを指摘し、且つ、それは Say 自身にとつては頗る得意とする所のものでもあり、又、其の經濟政策上の意見の基